

City of Birmingham Symphony Orchestra

Kazuki Yamada, Music Director

Violin 1

Eugene Tzinkindelean
Jonathan Martindale
Phil Brett
Sasha Raikhlina
Jane Wright
Nathan Bomans
Richard Thomas
Mark Robinson
Bethan Allmand
Cathy Chambers
Kath Gittings
Wendy Quirk
Alicia Berendse
Angus Bain
Luke Coomber
Anais Boyadjieva
★ Asako Fukuda

Violin 2

Lowri Porter
Kate Oswin
Moritz Pfister
Amy Jones
Liz Rossi
Gabriel Dyker
Bryony Morrison
Georgia Hannant
Tim Birchall
Tam Mott
Yuriko Matsuda
Beatriz Carbonell
Adam Hill
Henry Salmon

Viola

Chris Yates
Adam Romer
David BaMaung
Michael Jenkinson
Catherine Bower
Sarah Malcolm
Jessica Tickle
Amy Thomas
Isobel Doncaster
Mabon Rhyd
Abby Bowen
Henrietta Ridgeon

Cello

Eduardo Vassallo
Arthur Boutillier
David Powell
Miguel Fernandes
Catherine Ardagh-Walter
Helen Edgar
Sarah Berger
Jonathan Pether
Lorenzo Mesegeur
Abigail Hyde-Smith

Double Bass

Anthony Alcock
Julian Atkinson
Jeremy Watt
Mark Goodchild
Julian Walters
Matiu Gaffney
Aisling Reilly
Tom Neil

Flute

Marie-Christine Zupancic
Veronika Klirova

Piccolo

Helen Benson

Oboe

Martin Danek
Emmet Byrne

Cor Anglais

Rachael Pankhurst

Clarinets

Oliver Janes
Joanna Patton

Bass Clarinet

Mark O'Brien

Bassoon

Nikolaj Henriques
Tony Liu

Contrabassoon

Margaret Cookhorn

Horn

Elspeth Dutch
Neil Shewan
Mark Phillips
Jeremy Bushell
Alex Harris

Trumpet

Jason Lewis
David Hilton
Kaitlin Wild
Jonathan Quirk
Rob Johnston

Trombone

Richard Watkin
Anthony Howe
Andy Cole

Bass Trombone

David Vines

Tuba

Daniel Trodden
Gemma Riley

Timpani

Matthew Hardy

Percussion

Adrian Spillett
Andrew Herbert
Toby Kearney
Barnaby Archer
Iris van den Bos
Mark Norman

Harp

Katherine Thomas
Mary Reid

★ Assistant Conductor

Shinnosuke Ito

★ : supported by
RMF & Kazuki Yamada Global Project

CBSO

City of Birmingham Symphony Orchestra

Kazuki Yamada, Music Director

バーミンガム市交響楽団

音楽監督: 山田和樹



© Andrew Fox

2025 **7.4** 金 19:00開演 アクロス福岡シンフォニーホール
7:00p.m. Friday, July 4, 2025 at ACROS Fukuoka Symphony Hall

主催: (公財)アクロス福岡 / 読売新聞社 / FM FUKUOKA / ジャパン・アーツ 後援: 福岡市



山田和樹 指揮 バーミンガム市交響楽団
City of Birmingham Symphony Orchestra
Kazuki Yamada, Music Director

© Andrew Fox

7.4 金 19:00 アクロス福岡シンフォニーホール
July 4 Fri. 19:00 ACROS Fukuoka Symphony Hall

ラヴェル: ラ・ヴァルス

M. Ravel: La Valse

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.40 [ピアノ: イム・ユンチャン]

S. Rachmaninov: Piano Concerto No.4 in G minor, Op.40 [Piano: Yunchan Lim]

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 第1楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ | 1st Mov.: Allegro vivace |
| 第2楽章: ラルゴ | 2nd Mov.: Largo |
| 第3楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ | 3rd Mov.: Allegro vivace |

■ ■ ■ ■ ■

チャイコフスキー: 交響曲第5番 ホ短調 Op.64

P. I. Tchaikovsky: Symphony No.5 in E minor, Op.64

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 第1楽章: アンダンテ — アレグロ・コン・アニマ | 1st Mov.: Andante — Allegro con anima |
| 第2楽章: アンダンテ・カンタービレ | 2nd Mov.: Andante cantabile |
| 第3楽章: アレグロ・モデラート | 3rd Mov.: Allegro moderato |
| 第4楽章: アンダンテ・マエストロソ
— アレグロ・ヴィヴァーチェ | 4th Mov.: Andante maestoso
— Allegro vivace |

山田和樹指揮バーミンガム市交響楽団 2025年日本公演

6月28日(土)名古屋 愛知県芸術劇場コンサートホール 主催: CBCテレビ ◆
6月29日(日)西宮 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール 主催: 兵庫県/兵庫県立芸術文化センター ★
6月30日(月)東京 東京オペラシティ コンサートホール 主催: (公財)ローム ミュージック ファンデーション/ジャパン・アーツ ○
7月1日(火)東京 サントリーホール 主催: (公財)ローム ミュージック ファンデーション/ジャパン・アーツ ★
7月2日(水)東京 サントリーホール 主催: (公財)ローム ミュージック ファンデーション/ジャパン・アーツ ◆
7月4日(金)福岡 アクロス福岡シンフォニーホール 主催: (公財)アクロス福岡/読売新聞社/FM FUKUOKA/ジャパン・アーツ ◆
7月5日(土)京都 ロームシアター京都 メインホール 主催: (公財)ローム ミュージック ファンデーション/ジャパン・アーツ ○
7月6日(日)横浜 横浜みなとみらいホール 主催: 神奈川芸術協会 ◆
○シエク・カネーニ=メイソン(チェロ) ★河村尚子(ピアノ) ◆イム・ユンチャン(ピアノ)

Profile

山田和樹 (指揮 / バーミンガム市交響楽団 音楽監督)

Kazuki Yamada, Conductor

Music Director of City of Birmingham Symphony Orchestra



© Benjamin Ealovega

2009年第51回ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。ほどなくBBC交響楽団を指揮してヨーロッパ・デビュー。同年、ミシェル・プラッソンの代役でバリ管弦楽団を指揮して以来、破竹の勢いで活躍の場を広げている。2012年～2018年スイス・ロマンド管弦楽団の首席客演指揮者、2016/17シーズンからモンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団芸術監督兼音楽監督、2023年4月からバーミンガム市交響楽団首席指揮者兼アーティスティックアドバイザーを務め、その後、2024年5月には同団音楽監督に就任。2026/2027シーズン

より、ベルリン・ドイツ交響楽団首席指揮者兼芸術監督に就任予定。日本では、東京混声合唱団音楽監督兼理事長、学生時代に創設した横浜シンフォニエッタの音楽監督として活動。2026年4月1日より東京芸術劇場の芸術監督(音楽部門)に就任予定。

サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団、フランス国立管弦楽団への定期的な客演のほか、近年は、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団、スウェーデン放送交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、サンフランシスコ交響楽団にデビュー。

教育活動にも熱心で、小澤征爾スイス国際アカデミーに毎年ゲスト・アーティストとして招かれている。また、バーミンガム市交響楽団のアウトリーチ・プログラムにも力を入れている。

東京藝術大学指揮科で松尾葉子・小林研一郎の両氏に師事。ローム ミュージック ファンデーション音楽在外研究生として渡欧。出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、実行委員会代表を務めた『柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会』が平成28年(2016年)度文化庁芸術祭大賞、日本フィルハーモニー交響楽団と3年に亘り行った『山田和樹 マーラー・ツィクルス』が第67回(2017年)芸術選奨文部科学大臣新人賞、第56回サントリー音楽賞など受賞多数。2022年には、モナコ公国からシュバリエ文化功労勲章を受章。本質に迫るとともにファンタジーあふれる音楽づくり、演奏家たちと一体になって奏でるサウンドは、音楽の喜びと真髄を客席と共有し熱狂の渦に巻き込む。名実ともに日本を代表する人気マエストロである。はだのふるさと大使。ベルリン在住。

Kazuki Yamada



バーミンガム市交響楽団

City of Birmingham Symphony Orchestra



© Hannah Fathers

バーミンガム市交響楽団(CBSO)は、バーミンガムを本拠地とする国際的に著名なオーケストラである。音楽監督の山田和樹が率いる90人の優れた音楽家たちからなるファミリーは、バーミンガム市民やウェスト・ミッドランズ州をはじめ、世界中の人々に刺激的な音楽体験を届けることに誇りを抱いて活動している。

バーミンガムのシンフォニー・ホールを本拠地として、同市やイギリス全土、および世界各地で、毎年150回以上のコンサートを行い、古典から現代音楽、サウンドトラックから交響曲まで、そしてその中間に位置するあらゆる種類の音楽を演奏している。広範囲に及ぶコミュニティと教育プログラムと同時に、合唱団やユース・アンサンブルを有し、ミッドランズの音楽制作のあらゆる側面に100年以上にわたり携わってきた。

この長い伝統は、1920年にサー・エドワード・エルガーの指揮で行われたオーケストラ初のシンフォニック・コンサートから始まった。それ以後も、戦争、不況、社会の変化、市政の刷新などを経て、CBSOは“バーミンガムのオーケストラ”としての誇りを持ち続けている。エイドリアン・ボルト、ジョージ・ウェルドン、アンジェイ・パヌフニク、そしてルイ・

フレモーなどの首席指揮者たちのもと、芸術的に高く評価され、その名声はミッドランズを越え、広く知られるようになった。さらに国際的に広く知られるようになったのは、1980年に若きイギリス人指揮者サイモン・ラトルを見出したことがきっかけであり、芸術が都市全体に新たな方向性をもたらし得ることが示された。

ラトルに続き、サカリ・オラモとアンドリス・ネルソンスも国際的な評価を確固たるものにすることに貢献し、バーミンガムのために旗を振るというCBSOの伝統にさらなる磨きをかけた。そして、ミルガ・グラジニーテ=ティラのリーダーシップのもと、素晴らしい音楽をバーミンガム、ミッドランズ、そして世界の人々のために奏でるというオーケストラが得意とする分野での実績を積み重ねている。

2023年4月、日本人指揮者の山田和樹が首席指揮者兼アーティストティックアドバイザーに就任。2024年5月からは音楽監督に就任し、彼の指揮のもと、オーケストラは音楽の喜びとバーミンガムの魅力を広く伝えながら、すべての人が楽しめる、忘れがたい音楽体験を創造し続けている。



イム・ユンチャン (ピアノ)

Yunchan Lim, Piano



© James Hole

2022年第16回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて、史上最年少でゴールド・メダルを受賞、併せて聴衆賞、最優秀新曲演奏賞を受賞。

その演奏から現れる「魔法のような力」と「自然で本能的な質」(ラ・セーナ)で、世界中の聴衆を驚嘆させ、わずか18歳で、流星のように国際的スターダムに駆け上がった。決勝で演奏したラフマニノフのピアノ協奏曲第3番は、コンクールの中で最も話題を呼んだ。その演奏動画はYouTubeを介し世界中で1500万回以上も視聴され、アップ

された同曲の中で最も多い視聴回数を誇る。

2024/25シーズンの主な活動には、ワシントン・ナショナル交響楽団、ロンドン交響楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン放送交響楽団、ベルリン放送交響楽団、ケルン放送交響楽団との初共演の他、ニューヨーク・フィルハーモニック、ルツェルン交響楽団、パリ管弦楽団との再共演が含まれる。また今シーズンはケネディ・センターのリサイタル・デビュー、カーネギー・ホールへの再出演もある。

デッカ・クラシックス専属アーティストとして、初のスタジオ・アルバム「ショパン：練習曲集 作品10 & 25」は、韓国でダブル・プラチナを達成し、世界中のクラシック・チャートで1位になった。このアルバムはピアノ部門の2024年のグラモフォン賞を獲得し、ヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。それ以前にリリースした作品には、同じく2024年のグラモフォン賞にノミネートされたクライバーン・コンクールでのリストの超絶技巧練習曲(スタインウェイ & サンズ)、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」(ユニバーサル・ミュージック・グループ)、KBSの「2020韓国の若き音楽家達」出演のアルバムが含まれる。2024年1月よりアップル・ミュージック・クラシカル・グローバル・アンバサダーを務めている。

韓国の始興市生まれ。7歳でピアノを始め、翌年にソウル・アーツ・センターの音楽アカデミーに入学。13歳で韓国芸術英才教育院のオーディションに合格し、教師・指導者のソン・ミンスに出会う。韓国国立芸術大学の2年を修了し、現在はニューイングランド音楽院でソン・ミンスの下で学んでいる。



山田和樹の躍進ぶりは目を見張るものがある。昨年のシカゴ交響楽団デビューに続き、今年はベルリン・フィルにデビュー、さらに2026/27シーズンからベルリン・ドイツ交響楽団の首席指揮者兼芸術監督に就任することも発表された。まさに飛ぶ鳥落とす勢いの活躍によって“世界のヤマダ”としての存在感を高めているが、類い稀なセンスと発想の豊かさ、楽員の自発性を引き出しながらオーケと一体となってフレッシュな音楽を生み出す力量をみれば、それも当然だろう。現在音楽監督を務めるバーミンガム市交響楽団との今回の日本ツアーでも、まさに蜜月関係にあるこの楽団からオリジナリティに満ちた音楽を引き出してくれるに違いない。

ラヴェル：ラ・ヴァルス

近代フランスの作曲家モーリス・ラヴェル(1875－1937)は鋭い音感覚で新しい音楽を求めたフランスの作曲家だが、興味深いことにウィンナ・ワルツを好んでいた。そのことは1920年に書かれた管弦楽のための「ラ・ヴァルス」に示されており、彼自身この曲について、「ウィンナ・ワルツの楽章。渦巻く雲の切れ目からワルツを踊る人々が垣間見え、雲が散ると、回る多くの人で満ちた大広間が見えてくる。場は次第に明るくなり突然フォルティッシモでシャンデリアが輝く。1855年頃の皇帝の宮廷」と解説しているとおり、混沌とした響きの中からワルツが徐々に浮かび上がって発展し、輝かしい頂点に至るという構成で書かれている。もっともここで表現されているのは、古き良きウィンナ・ワルツそのままでなく、世紀末的官能性やグロテスクな不安感すら感じさせるもので、第一次大戦後の不安定な時代に生きるフランス人から見た19世紀ウィーンの幻想ともいべき曲となっている。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.40

セルゲイ・ラフマニノフ(1873－1943)が残したピアノ協奏曲の最後の作となったこの第4番は彼の人生の転機に生み出された。構想はロシアで活動していた1914年頃に遡るが、1917年ロシア革命期の混乱を避けて母国を離れたことによって作曲は中断する。彼がこの協奏曲に立ち戻るのはようやく1924年のことで、彼と同じくロシアから亡命していた作曲家・ピアニストのメトネルの勧めがきっかけだった。一応の完成をみたのは1926年で、初演は翌年フィラデルフィアで作曲家自身のピアノでなされたが、その後曲が長すぎると判断したラフマニノフは主に第3楽章を中心に改訂を施し、さらに1938年にも大きな改訂を施して最終稿が完成した。今回の演奏もこの最終稿(第3稿)が用いられる。有名な第2、3番の協奏曲に比べると和声的に錯綜した響きが際立つようになり、また打楽器群が多く加わるなど、亡命後の彼の新たな境地を窺わせた作品となっている。

第1楽章(アレグロ・ヴィヴァーチェ[アツラ・プレーヴェ])は勢いある管弦楽の導入に続いてピアノが力強い第1主題を奏する。第2主題は叙情的ながらもどこか複雑な響きを持つ。**第2楽章**(ラルゴ)は憧憬的な主題による緩徐楽章。中間部では突然脅かすような楽想が出現する。**第3楽章**(アレグロ・ヴィヴァーチェ)は活気に満ちた主題を中心とするラブソディックなフィナーレである。

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 Op.64

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840－93)の後期の所産であるこの交響曲第5番は、1877年の第4番から10年以上の間をおいて1888年に生み出された後期の傑作で、中期の第4番を引き継ぐかのように、運命との闘いが確かな構成のうちに表現されている。曲頭クラリネットに示される暗い旋律が運命を象徴する循環主題として全楽章に現れ、闘争→勝利という全体の構図を際立たせている。初演は1888年11月ペテルブルクで、チャイコフスキー自身の指揮によって行われた。

第1楽章(アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ)は序奏の冒頭に前述の循環主題が示される。感情の起伏に富む悲劇的なソナタ形式楽章である。**第2楽章**(アンダンテ・カンタービレ)は息の長いホルンの主題に始まるロシア的な叙情に溢れた緩徐楽章だが、中間部と終結部に循環主題が劇的に出現する。**第3楽章**(アレグロ・モデラート)は優美なワルツだが、ここでも最後にひそやかに循環主題が現れる。**第4楽章**(アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ)では朗々たる長調の循環主題の後、劇的な闘争が繰り上げられるが、最後は輝かしい勝利に至り、第1楽章第1主題も明るく高らかに再帰する。

